使用人シンデレラ

柚唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
使用人シンデレラ

【Ｎコード】
Ｎ８９８３Ｔ

【作者名】
柚唄

【あらすじ】
シンデレラパロ。
シンデレラは継母と二人のお姉さんにいじめられて……ではなく。地味な格好をしていたがために、ちょっとおめかししてきた使用人とシンデレラが入れ替わった？　本物の使用人もちょっと勘違いしてて、シンデレラも惰性で流されちゃって……。
三人の姉に、使用人らしく色々な雑用を命じられ、シンデレラと名付けられる女の子のお話！
のはずだったのに……！　なんかのほほほーんとやってます。しか

もシンデレラ空気。

義娘のはずが使用人になる。

期待していたのだ。

だから、こんな間違いが起きてしまったのかもしれない。

「これが私の娘の写真だよ」

そう言って、お義父様に手渡されたのは、白と黒で印刷された写真。そこに映るのは、まさに人形と言っていいほどのかわいい子どもだった。八歳ぐらいの、顔だけをこちらに向かせて、口を開けて呆けている女の子。

絵ではない。顔を幾らでも変えられる絵ではない。大商人という、金持ち故の写真。

きっとこの子は上品で、とてもすばらしい女の子に違いない。

話を聞くには、庶民学校のお嬢様学校に通っていて、お金持ちであろうと頭が良くなければならない学校に通っていたんだとか。

今年で十四歳となり、庶民学校を卒業し、性格は明るめ。

私達は、新しい妹に対して、期待した。

名前も知らない妹とお義父様、そして今日新しく来る、妹専属の侍女を家の中でそわそわしながら待っていた。お姉様には邪魔だと言われてしまったけど、しょうがないじゃない！　楽しみなんだから。

玄関先に長く立っていたら疲れてしまったので、ソファーに腰をかける。お姉様もお母様も待ちくたびれたのか、ソファーに座って三人で玄関を見ていた。

パカッパカッパカッ。

聞こえてくるは馬の足音。てっきりお義父様と妹が到着したのかと思ったけど、少し違う。……多分、早馬だ。

「奥様！　奥様！」

「なんですの？　騒々しい。何がありましたの？」

「だ、旦那様が！　新しい旦那様が、道中病で倒れ、そのまま……」
荒々しく家の中に入ってきた男。
まさか、そんな！　お義父様が！　お義父さまと過ごす生活だって楽しみでしたのに！
「お姉様、お母様！　妹は無事なの？」
「お嬢様は用事があり、一足先にこちらに来ていたそうです。徒歩でのご到着になります。そちらにも早馬が出てます。荷物は旦那様の馬車へ乗せてあったようで……後で届きます」
「……わかりました。下がりなさい」
男が出て行ったあとお母様は私室へと消えてしまった。戻ってきた頃には目が赤くなっていたから、多分泣いたんだと思う。
「……お姉様、大変なことになったわね」
「そうね……。妹は、二人で慰めましょう？」
ええ、と頷いて、変に落ち着いた気持ちで玄関を見つめる。引っ越しの当日に、父が死ぬ。妹の心は大丈夫だろうか。とても心配だわ。
コンコンッと控えめに叩かれたドア。
三人で目を見合わせてゆっくりと頷く。お母様がゆっくりと扉の方へ歩いて、取っ手に手をかけて開ける。妹と、初対面になるのだ。まあ、もしかしたら侍女かもしれないけど。
そこにいたのは、落ち着いた色の、飾り気のないドレスを来た女の子、
顔は色白、目は少し釣り目、髪の毛はふわふわの金糸、目も恐らく金。
妹だ。
私達は確信した。
「待ってたわ！　ささ、入って入って！」
「え、あ、はい」
声も鈴を転がしたようにかわいい声。ああなんてすばらしい妹なの！

「お父様が亡くなって、とてもお気の毒に……」
「え？　ご存じでしたか……。いえいえ」
「寂しいなら寂しいって言っていいのよ？　あなたは今日から私達の妹なるの」
「……わ、私、皆様の妹になるんですか！？」
「何を驚いてるの。当たり前じゃない？　侍女も手配したのよ？
私は長女のメリッサ」
「私は次女。アリソン」
「え、あ、わ、私はイザベラです！　よろしくお願いします！」
かわいいかわいい妹の名前はイザベラという名前らしい。かわいい妹に相応しい、かわいい名前だ。私、妹が大好きになると思う。
未だに来ない侍女に呆れつつも、仕方ないから自分達でイザベラに部屋を案内する。
こういうと変態かもしれないが、イザベラの髪から匂う香りがとてもいい。
「侍女はまだついてないの。あ、あなたの服とかは後で届くわ」
「ふ、服、ですか。それに、侍女って、あの」
「ああ、あなたの侍女よ」
「は、はい」
「家の中を案内してもいいんだけど……一人でする？　それとも私達とする？」
「色々考えたいので……一人にしていただいても良いですか？」
そうよね。この子、お父様を亡くしたばかりですものね。
「ええ、もちろん。侍女が来たら部屋に荷物を置かせとくわね。」
「はい！」
さって、と。
私達が部屋にいると、イザベラも部屋から出れなさそうなので、お姉様を目を合わせてうなずいて出る。そのまま一階に下がると、お母様が待っていた。
「これ、服ですって。あとで持って行きなさい。そういえばあなた

達、名前聞いた？」
いつの間に馬車が来たのだろうか。とりあえず、袋を床に置く。結構量があるから、簡単に持てるものじゃないわ。
「イザベラって言うんですって！」
「あら、良い名前。寂しがってたら慰めるのよ？」
お母様が自室に入るのを最後まで見て、色々と溜めて興奮を吐きだした。
「ね、ね、お姉様！　イザベラ、すばらしい妹じゃない！」
「ね！　私、もうあの子大好きですわ！　あの子の言うことならなんでも聞いちゃうし信じちゃう！　もうそっれぐらい大好き！」
「そうよね、ね！　しかも――」
コンッコンッ。
私の声を遮る形で叩かれた扉。
せっかく妹の事について語り合ってたのに……と不貞腐れつつも、大雑把に扉を開ける。どうせ侍女だし。まったくもう。
「は、はじめまして……」
妹と違って、何か暗そう。
髪の毛は茶。暗そうって思ったのは、前髪が目を覆い隠してるから、服はまさに庶民って感じ。そういえば、妹が商人だし、世話役は庶民から選ぶってお母様が言ってたわね。一応侍女ってことになってるけど、使用人に近いのかしら。さっきちょっと興奮とか色々遮られちゃったし……意地悪しようかしら。
「あんたには今日からびっしばし働いて貰うわよ」
お姉様の方を向けば、いいこと考えたわね、とでもいうようにニヤッと笑っている。
「そうね、まずはこの荷物、すぐに妹の部屋に運びなさい。二階の廊下の突き当たりの部屋よ？」
お姉様も意地の悪いことを言う……荷物、結構あるのに。それに、そういうのは普通、侍女の仕事じゃなくて使用人の仕事。
「あ、は、はい」

侍女としての仕事に戸惑いを感じたのか、はたしてどうなのかはしらないが、顔に疑問を浮かべながらあわてて床に置いてある荷物を持ち上げる。
意外と力があるのか、荷物の半分は持ち上げた。
ドタバタと階段を上がっていく侍女。……もう使用人でいいかしら。
妹は静かに階段を上がって言ったっていうのに……やっぱお嬢様学校卒業って違うわね。
少しして降りてきたその子にお姉様が声をかける。
「あなた、今日から使用人ね。住み込みだし、いいわよね？　お金は出すわ」
……使用人にするのね。やっぱお姉様と考えることって似てるわ。
「は、はぁ。ええ、まぁ」
「使用人なら使用人らしくなさい。私はメリッサ。こっちは妹のアリソン。今度から何かあるときは様付で呼ぶのよ？　あ、上の妹はイザベラ。いい？　わかったかしら」
「は、はいわかりまし――」
「わかりましたお嬢様、それかわかりましたメリッサ様、でしょ？　それぐらいもわからないの？　低脳ね」
「……申し訳ございません、お嬢様」
流石お姉様。使用人への教育がしっかりしている。
「わかったならそれでいいのよ。さ、荷物さっさと運んじゃいなさい」
「……はい、では失礼いたします」
そういうと、使用人、って名前聞くの忘れたわ。使用人は残りの荷物を抱えてバタバタと上に行った。
「流石お姉様ですわ！　教育がしっかりしてます！」
「おほほ。当り前ですわ。ま、使用人にしたからにはお金もあげるし、他に色々なこともしてもらおうかしらね」
「あ、お母様に報告しましょう？」

「そうね」
お母様はまだ部屋で泣いてるのかしら。そしたら申し訳ないのだけれども……。わ、私だってお義父様が亡くなって悲しいけど……。あ、あとでイザベラの様子を見なきゃ。
「お母様。メリッサとアリソンでございます」
お姉様が控えめにドアを叩いて声をかける。
「どうぞ。どうしたの？」
「お母様、あの侍女、使用人にしてもよろしいですよね？」
「本人が良いって言ったなら、それでいいわよ」
さっき一応良いっていったし、問題ないはず。
「住み込みですし、イザベラのまわり以外のこともやらせていいですわよね。そのかわりにお金を出しますの」
「それもいいわね。住み込みなら仕事時間も多いし……。そうね。他の使用人は全て首になさい」
お母様も思い切ったことをやるわ。今日入った使用人以外で住み込みの使用人はいなかったから、夜は仕事をする人がいなかった。今日みたいに使用人を家に来させない日もあるし。その分あの使用人には頑張ってもらおう。
「イザベラにも、侍女じゃなくて使用人になったことを言わなくてわね。呼びなさい」
「はい。イザベラー！　階段の下に来なさーい！」
お姉様が大声で、家の中に響き渡るように叫ぶ。階段の下に来るように言ったのは、まだイザベラにお母様の部屋の場所を言ってなかったからかしら。
普段は淑女らしく大声なんて出さないけど、使用人がいない今はこうするしかない。
ほどなくしてお姉様とイザベラが一緒に来て、使用人になったことを説明した。
イザベラは使用人に何を言えばいいのかわからなかったようだけれども、仕事させればいいのよといったら納得した。さーてっと！

今日から楽しい、妹との生活が始まるわ！

義娘のはずが使用人になる。（後書き）

読んで下さりありがとうございました！

暖炉を掃除して灰まみれになる。

「あなたに今から仕事を教えてあげるわ。毎日しっかりやるのよ？いいわね」

使用人に仕事を教えるように、といってイザベラの様子を見に行ったお姉様。

くー私も気になりますー行きたいですー！

とりあえず使用人を大声で呼び出して、部屋に入れました。私の部屋は階段を上がってすぐにあります。

「はい」

「ところであなた、文字は読める？　読めるなら紙に書いてあげるわ」

庶民の識字率は低くない。老人の世代だと読めない人もいるけど、今の世代なら庶民学校があるから、多分読める。けれど一応確認しなくてわね。

「はい、読めます。ありがとうございます」

机の上のインクの蓋を開け、紙を一枚取り出す。にしてもこの使用人、訛はないのね。農民じゃないとしたら……町娘かしら？

「あなたの仕事はね、えっと……洗濯に、掃除に、私達が随時呼びつけるから、それをこなしなさい。私達の家は洗濯機なんかないから手洗いよ。破ったりしたら減給ね。掃除はー……毎日隅々やりなさい。掃除用具は部屋から出て右に八歩って所かしら？　あ、その隣の部屋があなたの部屋よ？　んー……あとは思いつかないわ。とりあえずそれをなさい。料理とかはコックを雇っているから。ああ、ご飯はコックにでも頼んであげるから、あとでまた呼ぶわ。とりあえずこれだけね」

私の家は結構貧乏だ。爵位は持ってるけど、貧乏。そうじゃなきゃ、いくら恋愛結婚だからって商人とは結婚しないわ。

だから洗濯機ものなんてないし、もちろんカメラもない。はぁ…

…お金、欲しいわ。
紙の上にササッと書いたものを使用人に渡す。
「ありがとうございます」
うん、この子礼儀がなってるわね。掃除とかしっかりできるかわからないけど。礼も完璧じゃない。直角の九十度。
そして疑問が湧くの。
「もしかして、あなた使用人やったことあるの？」
侍女として呼んだのに？
「え、いいえ、ありませんが……」
「そう。じゃ、掃除……あ、忘れてたわ。使用人の制服はあなたの部屋の引き出しに入れてあるの。それを使いなさい。わかったわね？」
「はい、わかりました」
「じゃ、さっそく掃除なさい」
礼をして出て行く使用人。うん、この使用人、使えそうね。
……名前聞くの忘れてたわ。でも、今日から使用人も一人だし、いっか。

「見て見てアリー！　イザベラ、とってもかわいいわ！！」
ちょっと来なさい、と言われてお姉様についていけば、そこにはお姫様が！
お姫様じゃないかと見違えるほど、かわいいイザベラが！
控えめの色の、ピンクのドレス。結いあげられた髪。桃色に染まる頬。
「とーってもかわいいわ！　流石イザベラね！」
私が男ならこんな子放っておかないわ。姉ながら悔しいけど、この子には負けるわね。
「は、恥ずかしいです……」
「イザベラ、あなたは自信を持ちなさい。あなたはかわいいんだから」

お姉様がイザベラに言う言葉にうんうん頷く。まあ、オドオドしててもかわいいとは思うけれどね。
「そうね……まずは、人の上に立つってことに慣れてほしいし……。アリー、使用人を呼んできなさい。イザベラに命令させるのよ」
お姉様ったら人使いが荒いですわ。命令っていうと酷そうですけど、イザベラの命令だとすごい優しそうですわね。
はい、と返事をして使用人を探しに行く。なんとなく大声を出したくない気分なのよ。
なんとなく向かったのが掃除用具入れ。……んーいつもここに来てるわけじゃないけど……バケツと雑巾がないわね。掃除はしっかりしてるみたい。
さてさて、どこにいつのかしら？
二階にはいないようだったので、一階に降りるとすぐに見つけた。玄関を掃除している。
制服もちゃんと着れているようだ。やっぱりこの使用人、使えるわね……。
使用人は女を雇うことが多いが、その服はドレスではない。掃除してどうせ汚れるんだし、布もそんなに使わなくていいだろう、ということで、白いシャツの上に、エプロンを着るという簡単な服装だ。
床を雑巾で拭いていた使用人がこちらに気付いたらしく、立ち上がって戸惑うように礼をした。……ああ、そういうのは教えてなかったっけ。
「別に掃除中とかは礼をしなくていいわ。ちょっとイザベラの部屋に来てもらいたいの。掃除道具はそこに置いといていいから上に上がってきなさい」
「はい」
使用人が雑巾をバケツの中に入れるのを見て、階段を上がる。さてさて、イザベラはどういう命令をするかしら？
「お姉様、使用人を連れてきましたわ」

「ご苦労様。ささ、イザベラ、命令しなさい」
お姉様に命令しろと言われてうろたえるイザベラ。ああ、もう！
なんてかわいいの！
「え、ええ、っと」
決心がついたのか、目を閉じて息をゆっくりと吐いた妹。静かに目を開いて、こう言った。
「暖炉って、あまり使われてないですよね？　そこを掃除して、灰かぶりになっちゃいなさい」
私とお姉様は唖然です。口調はいつも通りの――といっても、まだ知りあって一日目――イザベラなのに、奥に何かあるような、そんな……。
「は、はい」
……でも、ある意味イザベラって貴族らしくなった気がするわ。いいんじゃないの、ええ。
お姉様と目で頷いて、使用人に暖炉を掃除するように言おうとした、その時だった。
「イヤッ」
お母様の悲鳴と、水をこぼしたような音。
条件反射で駆けだす私とお姉様。イザベラと使用人も慌ててついてくる。
階段を降りれば、水浸しになったお母様が！　その近くには横になったバケツが。
……私がここに置いといていいって言ったからだわ！
「お母様、大丈夫？」
「ええ、大丈夫よ。……ここにバケツを放置したのはあなたかしら？」
お母様にけがはないようだけれど……使用人に向かって言う言葉がトゲトゲしい。どうしよう、私が招いてしまったことですのに！
「申し訳ございません、お、奥様」
「使用人が初めてなのは免罪符にはならないわよ。よってあなたの

夕ご飯は抜きよ？　私は着替えてきます。みんなも部屋に戻りなさい。あなたはここをキレイに掃除しておくこと。埃一つでもあったら承知しないわ」
そういって部屋へとスタスタ歩くお母様。部屋に入る直前、こちらを、正しくは使用人をみてこう言った。
「暖炉でも掃除なさい。灰まみれになっても、あなたなら大丈夫よね？」
……どうやらお母様は、とても怒っているらしい。発言がイザベラと被っているのはたまたまだろう。にしても、イザベラはよくそんなこと考え付いたわね。……じゃないわ！
私がこんなことを招いてしまったのに……。
階段を上っていくイザベラと、こちらを見ているお姉様。
「私の事は気にせずに」
といえば、名残惜しそうに二階へ上がっていった。
使用人をみれば、ぶつかる視線。
慌ててしゃがみこんで掃除を初めた使用人に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。
お母様は普段こんなに怒らないことも理解してほしい。……きっと、お義父様が亡くなったからであって……。あなたにあたっちゃってるだけなのよ、と言いたい。
でも、そういうのは使用人にかける言葉ではないのだ。
夕飯もなしになってしまったし……。使用人に謝ろう。ええ。
「あの、ごめんなさいね……」
「いえいえ、お嬢様はお気になさらず。と、こちらの旦那様が本日亡くなられて、とても辛いのでございましょう」
……理解のいい使用人でホンット助かったわ。
今日来た使用人が、何故そのことを知っているのかなんてまったく疑問に思わず、あたしは安堵した。
「えっと……掃除、頑張ってね」
手伝ってあげられなくて、ごめんなさい、と言葉に孕ませる、つ

もりで言う。そんなところをお母様に見られたらって思うと、ね……。

「はい、ありがとうございます」

その声を聞いて、申し訳なく笑ってから私は二階へ上がった。

部屋にいてもそわそわして落ち着かない。そろそろ夕食だけど、あの使用人は大丈夫かしら……。あ、皿洗いの仕事言わなくちゃね、ええ。

夕食を取り終わると、お母様は何を考えたのかこんなことを言った。

「あの使用人はちゃんと仕事してるかしら？　暖炉の方を見に行きましょうか」

従わない理由もなく、私はただ使用人が心配でそれに着いていく。

暖炉があるのは客間。客間に入れば、灰まみれになって掃除している使用人がいた。

「あら、なんて汚いの。掃除はきちんとしてるようだけど。シンデレラ、他の床を汚すんじゃないわよ」

シンデレラ……。お母様、本当にどうしちゃったのかしら。

お母様は貴族でも、とても辛い思いをしてきたから、すっごい優しい人なのだ。なのにこんな……。

「わかりましたかシンデレラ」

「は、はい」

「それじゃ、私達は部屋に戻りましょう。そこを綺麗にするまで寝たらいけませんよ。わかりましたね」

「はい」

ああああもう！　どう謝ったらいいのかしら……。

湯浴みを終えたころに、廊下でトボトボと歩く足音が聞こえる。

ドアをゆっくり開いて足音が去っていく方をみれば、そこにはさきほどより灰まみれになった使用人……。

「シンデレラ、ね。あーもーそれでいいや」

ダルさを感じさせる声で自分の部屋に入っていった使用人。

それを見て私が思ったことと言えば。
……もしかして、そんなに怒ってない？　シンデレラって認めちゃったの？
ドアを閉め、呟く。シンデレラ。
シンデレラ。それが、今日からの、使用人の、名前。

暖炉を掃除して灰まみれになる。（後書き）

シンデレラの本名は決まってませんっ
読んでくれてありがとうございます！

食卓の一員になる。

きっと昨日は夜という闇に頭をやられてたんだわ。使用人の名前がシンデレラって、それ失礼すぎるじゃないの。何認めてんのよ私。

飛び上がるように起きて窓の外を見れば、夜はまだ明けたばかりだと教えてくれた。

頭が冴えてるのかしら？　そんなに眠くないし……起きようかしら。

使用人が気になるわ。……昨日は新しい環境になって、いきなり使用人になって、灰まみれになったから疲れてるだろうよね。だからあまり起こしたくないけれども……。もう起きてる可能性もあるけれど、それはないわよね。

トン、トン、トン、トン。

コックが食材を切っている音。そうだわ、お腹も空かせてるだろうから、お母様が起きる前にコックに頼もうかしら。あの子の朝飯まで抜きかねないもの。

身支度を整えてドアを開ける。

階段下から良い匂いがする。ちょっとお腹減ってきたかも。

「おはよう」

「あ、おはようございます、アリソン様。お早いですね。申し訳ございませんが、朝食はまだ出来上がっておりません」

このコックは訳ありの人らしく、この貧乏な家でも比較的に安い値段で雇っている。そうだ。使用人も一人になったから、住み込みでも少し金銭的余裕出たわね。

「わかってるわ。昨日新しい使用人が来たのは知ってる？」

「ああ……、奥様を怒らせて夕飯を……。それで、何か？」

「原因は私にあったのよ。で、お母様が起きる前に、あの子の分作って欲しいのよ。まだ起こって朝まで抜かれたら困るでしょ？」

納得したような顔でコックが頷くのを確認して、近くのソファー

に座る。
「アリソン様はお優しいですね」
コックが包丁を器用に使いながら話しかけてきた。優しい？　ちょっと勘違いしてるんじゃないかしら？　訂正しなきゃね。
「別に優しくないわよ。使用人が自分でミスをしたわけじゃなくて、私のせいでお母様を怒らせちゃったの。しかもそれを言い出せなくてね。家の立場が危うくなる、なんてことにならないなら。人間として正しいことするのが貴族ってものよ？」
貴族だって貴族で大変なんだから。なーんて。私だって庶民の大変さなんてわからないんだけどね。
「わかってますよ。私だって長年ここに努めてるわけじゃありません」
「じゃあ何よ？」
どこが優しいっていうの……。包丁のリズムが眠気を……。
「……どこだと、思います？」
私、普通の、せいか……く……。すぅー……。
返事がないアリソンに気付き、コックはクスリと笑った。
「まったく、困ったお嬢様だ」
口ではそういうものの、コックの心境はとても晴れ晴れしていた。普段は見れない寝顔を見れるのだ。ソファーで寝るなんてアリソンらしくないが、寝顔を見れるという点については使用人に感謝した。アリソンに負担をかけてくれてありがとう！

「アリソン様？」
目を開けたら、目の前にコックの顔が度アップ。
ど、どうして私の部屋に！？　困惑した私の頭に記憶が流れ込んでくる。ああ……って、私寝ちゃったのね！？
「どのくらい？」
「何が、でしょうか」
「寝てた時間よ。どのくらい過ぎたの？」

お母様、まだ起きてないわよね？　部屋以外、しかも殿方の居る所で居眠りしただなんて、お母様に知られたら大変だわ！
「一時間でございます。あと半刻で朝食です」
「わかったわ。ありがとう」
そう言いながらコックが差し出したサンドイッチ。食べろっていうのかしら？　……あ、そうだ、使用人にあげなきゃね。サンドイッチなら皿とかいらないものね。
あと半刻で朝食だということなら、そろそろお母様が起きるということだ。だからその前に部屋に行かなくては……。
なんとなく澄ませた耳に聞こえるは、トットットットという音。
強弱からするに……階段を、上がる音。
上がる、音？
今ここにはコックと私、二人の人がいる。
じゃあ他に下にいた人は、誰？
……お母様！
私はそう考えた瞬間急いで走った。お母様お母様！　そりゃ、私が寝てる間に姉妹の誰かが降りてきたのかもしれない。でも朝食だって用意されてるわけじゃないから、そんなことする意味がない。だからお母様に確定。
お母様が使用人に何をするかとても心配だわ。ああお母様！　私のせいなんです、と言えればどんなによかったか。私は臆病者です。使用人が許してくれたから、それに甘えています。自分でも自覚済みですわ。
階段の下までは走ったものの、階段はやはり音が聞こえるから早足に変更。上がり切っても早足。お母様が見てるかも知れませんから。
お母様、発見。やっぱり使用人の部屋に！
けれど、その部屋をノックする様子が心なしか柔らかい。私は様子を見ることにして、まずは自分の部屋に引っ込んだ。私の部屋は顔を出せば使用人の部屋の扉が見えますので。

「使用人さん、起きてらっしゃる？」
シンデレラ、ではなく使用人さん、と言ってるあたり、お母様の機嫌は治っているに等しいだろう。でもアリソン。油断しちゃダメよ。一応見張っておくのよ。
自分が嫌になった。
見張っておく。その中には少なからず私の汚い感情が入っていた。
使用人が、そこにバケツを置いた理由をお母様に言わないかどうか。
私はお母様に怒られるのが怖かった。少なくとも良い子をやっているつもりだ。猫を被ってるわけでもない。お母様はよく私を褒めてくれる。だから、その分。怒られたら反動がすごいんじゃないかって。すごく怖くなるの。
お母様は部屋の前に立ったまま動かない。部屋から使用人が出てくる様子もなさそうだ。……多分、寝てるんでしょうね。
しょうがない。
といことで、私は一つ、あることをすることにする。
使用人の部屋は私の部屋とドアで繋がっているの。だからそこから起こすわ。
今使用人が使ってる部屋は私の部屋である。といっても、荷物置きの部屋だったの。でもこんな貧乏な家の娘が、荷物置きが必要なほどを持つかしらねえ？　服だって別の所に置いてあるし、その部屋は廊下にも出れるから、いっそ住み込みの侍女の部屋にしましょう、って感じで今の使用人の部屋は空けられたのだ。
繋がってるドアから使用人の部屋に入るのは避けることにしたけど……有効活用すればいいのよ、ええ。
ドアから入って……。何か悪いことをしてる気分だわ。泥棒っていうのかしら？
部屋の隅にくっつくようにして置かれた寝台。案の定、使用人はそこで眠っていた。
布団は荒れてて……寝相、悪いのね。

スヤスヤと眠る使用人。さて、どうやって起こそうかしら。
「朝よー。起きなさーい」
反応がない。……眠りが深いようね。
「ジェニードレス似合うやん」
……はい？
使用人の目がパチっと開いたと思ったらいきいなりそんなことを言われてしまいましたわ。ジェニー？　ジェニーって誰なの！？
……きっと寝ぼけてるんだわ。
「お母様が呼んでるの。機嫌良いようだから、大丈夫よ？」
覚醒してない頭がキチンと理解してないのか。寝ぼけ眼でこちらを見つめ、何が何だかわからないというように眉間に皺を寄せ――悪いことをした子供が大人に見つかった時のような顔をした。
つまり、「あ、やべ」という顔だ。
「おはようございますお嬢様」
ん？　ああ、使用人が主人たるこの家の者より遅く起きてるからね。
その点は気にしないのよ。仕事をしっかりやってくれれば起床時間なんて関係ないわ。
「おはよう。さ、出て出て」
力任せに使用人を引っ張る。でも使用人も頭はすでに冴えてるのか、すくっと立ち上がってくれた。
「起こして頂きありがとうございました」
こちらに素早く一礼。
慌ててドアの方へ走り去ったので私も慌てて自分の部屋へ。このドアからは流石に覗けないから、廊下のドアからこっそりと様子見。
「こんな見苦しい姿で申し訳ございませ、ぅは！」
見苦しい姿とは、寝起きの姿だろう。……まあ時間なかったししょうがないわよね。
そして、うは。これは、お母様が使用人に抱きついたときに発された音だ。……お母様！？

「昨日はごめんなさい！　私イライラしてたの！　お腹、減ってない？　今日は一緒に食べましょうね！　大丈夫、コックは臨機応変でやってくれるから。まあ、髪の毛に灰がたくさんついてるわ！　私が洗ってあげる。ああもう！　ホントにごめんなさいね！」

凄い勢いで喋るお母様に対し、使用人はタジタジだ。

「いや、あの、だいじょ、いや、一人で洗えま、うはい！」

でも……それを改めて確認して、胸をなでおろした。

お母様が怒ってるわけでもないから、使用人がまた何かされるわけでもない。

さて、私はコックにもう一人前用意するように言おうかしらね。サンドイッチは無駄になっちゃったけど気にしたら負けよね。

お母様の声も大きかったし、そろそろお姉様もイザベラも起きてくるかしらね？

今日の食卓は楽しいものになりそうだわ。

「ねえ、コックさん」

「はい、なんでしょう。奥様の機嫌、大変よろしいようですね」

ハニカミながらコックが言った。コックは美形なので大変似合います。多分そこらへんの貴族よりカッコいいわ。

「朝は使用人も一緒に食べることになったの。急で申し訳ないけど、用意してくれる？」

「承知いたしました」

……何か、いいことをした気分だわ。

当然のことをしたまでだけど。心が少し軽くなったとでもいうのかしら？　使用人さん、ごめんなさい、私嫌な子。

それが心の中を締め付けていたというのに、私の心はとても晴れ晴れとしている。……そんな自分に、やっぱり嫌気がした。

おもしろそうなのでこのまま使用人を続けることになる。

「使用人さんはどちらから？」
「あ、ポキプシーからです」
「遠いところから来たのねぇ」
城下町を使用人と二人で歩きがらお喋りをする。
そんなことになったのは、朝、お母様が使用人に謝り倒してからだった。

私、お母様、お姉様、イザベラ、コック、使用人と六人で朝食を取ったあと、イザベラは使用人に話しかけていた。コックは安い価格で雇う代わりに、食事は同じものを一緒に食べるのだ。
使用人は数も多かったし別々に食べるようにしてたけど、この家は身分はそこまで気にしてない。
「あ、あの、使用人さん」
食事中は静かに、というのが貴族のルールである。
慣れている人からしたらどうとも思わないけれども、その雰囲気の中で一言も発しなかったイザベラと使用人は偉い。まあ庶民だし、空気を読むのはうまいのかもしれないわね。
……あら？　そういえば、イザベラは昨日の夕食からもそうだけど、二人ともテーブルマナーがしっかりしてたわね？
イザベラはお嬢様学校出身だし、何かそういう教育をしたとして……。
使用人の方はどうなのかしら？　まあお母様が雇った侍女だし、コックのように何か訳ありの子なのかもしれないわね。置いときましょうか。
「はい、なんでしょうか？」
使用人がキョトンとした顔で振り返る。
イザベラが少しどもって喋っている理由には予想が付く。昨日、

結構酷いこと言っちゃったものね。なのにそれに対して言われた方は気にしてないかのよう。
「あ、昨日はごめんなさい、その……。シンデレラって……」
「私の方からもごめんなさい。今日は仕事しなくていいわ。休みよ休み」
申し訳なさそうに謝るイザベラの後ろから、お母様が身を乗り出すようにして謝る。
「お、お気になさらず……。ありがとう、ござー、いま、す」
仕事二日目にして休みね……。
でも、することあるのかしら？　まあ私が気にすることじゃないのはわかってるんだけど……。街の案内でもしようかしら。あ、でもこの近くに住んでた可能性もあるわよね。
「使用人さん、一緒に散歩でもしに行きませんか？」
お礼と、謝罪も兼ねて。
「お誘いありがとうございます。是非」

のようなことがあって現在の状況が形勢されていた。
お母様はお義父様のことで何かやらないと行けないことがあるらしく、王宮の方へ出かけている。お姉様とイザベラは、私達とは別々に街を案内中だ。
「でも、ポキプシーの前はここらへんに住んでたもので」
「あら、じゃあここらへんは使用人さんの友達がいるかもね」
なんとなく名前を聞き出すタイミングがつかめない。使用人さん、ね。
「まあ、ほどほ――」
「シーンデーレラーーーー！」
人目憚らぬ大声、というほどではないにしろ、人がちらほらといる朝の街ではよく通る声。タッタッとこちらに手を振りながら走ってくるのは一人の少女。どうやら馬車から降りたようで、その後ろから慌てて従者らしき人が追いかけている。つまり、貴族の少女。

シンデレ、ラ？
「へ？　あ、アイシュリーー！」
同じように手を振り返す使用人。
つまり……使用人がシンデレラって呼ばれたわけよね？　あ、ら？　あららら？
どういうことかしら？　シンデレラ？　灰かぶりって侮辱の言葉だったわよね？　私の記憶違いじゃないはずよね！？　親しげに使用人――つまりは庶民――をシンデレラと呼ぶ貴族の少女に、当たり前のように返す使用人。
頭がこんがらがってしょうがない。
「久しぶり。元気そうだね」
「そっちもじゃん。あ、丁度お話したように友達です」
砕けた口調で話す貴族と使用人。頭の中疑問だらけ。
「アイシュリー・オードン・スケッチマンですわ。よろしくお願いします」
「あ、アリソン・ロウリー・セニグリアですわ。こちらこそ」
スケッチマン、ですって？
スケッチマンは公爵家であると同時に、先代の王弟の息子が当主になっている家だ。評判に悪い噂を聞かなく生活も豊かで、生活という点に関してはサーニグリア家とは大違いである。
そんな、正に一流貴族と称されるスケッチマンの娘と、使用人が、友達？
しかもシンデレラってどういうことかしら？　昨日シンデレラという単語を聞いたばかりだということもあって、もう何が何やら。
「シンデレラはあだ名でして、友達からよくそう呼ばれてるんです。だから昨日もそんなこと気にしなかったっていうか……」
あだ名。……良い意味のあだ名ではないと思うのだけれども？
「まあそれは幸いですわ。えっと……わ、私はあちらに用があるので、ここでお二人は話してて下さい。では」
しどろもどろになりながら言って、その場から適当な場所に走り

去ってから気付く。
私、失礼をしてしまったわ！
スケッチマン公爵家の娘――おそらく当主の娘――に対してなんてことを！
幸い使用人が友達ですし、なんとか取り計らってくれてることを祈るとして……。
頭の中で、とりあえず整理しとこうかしら？

などと、アリソンが考えている途中。
件（くだん）の使用人とスケッチマン公爵家の娘は呑気にお喋りをしていた。
「シンデレラ、お父さんとセニグリアの女主人結婚したんだよね？ ってことはあの人姉じゃないの？ なんか違和感あったんだけど」
「あー、うん。てか色々あってねー。父さん、死んじゃって」
「へぇ、そ……え？」
「いやさね、サーニグリアに来ようとした昨日に病気でお空に向かいましたとさ」
なんでもないというように話すシンデレラ。アイシュリーはシンデレラの言った言葉を頭の中で再度確認しながら質問をする。
「え、っと……悲しく、ないのかな？」
少し言葉を選び間違えたかとは思いつつも、そのまま訊く。シンデレラに対してなら平気だと思ったから。
「おいおいそういう野暮なこと訊くもんじゃないですよーっと。いや、なんか悲しくないんだよね。娘として薄情だとは思うんだけど、なんだかなーっていうか」
シンデレラは実際不思議な感覚に囚われていた。
自分の性格によって由来するものだとは思われるが、まったく悲しくない。父親が死んだと言うのに、まったく。娘としてなんということだろうか。
「そ、っか。それで、アリソンさんは？」
アイシュリーは話題を逸らしつつ、気になっていたことを再度尋

ねる。
「そうなんだよ！　聞いて聞いて！　なんかおもろいん！」
「ん、何かあったの？」
「なんかね、ウチに侍女用意してたっぽくてさ。色々誤解が生じたっぽいんだけど、今入れ替わってるの！　ウチ使用人！」
「……どういうこと？」
アイシュリーは理解できない、とでもいうように眉を顰めながら訊いた。
シンデレラには少し説明力が足りないところがあって、話を省略する癖があるのだ。もう少し詳しく話してほしい。
「えとね。何かあったかわからんのだけど、ウチ、多分サーニグリアの人たちに顔とか知られてなかったっぽくて。んで、ウチが屋敷についたら何故かすでにウチが屋敷についているらしく。んで、ウチは新しく雇った侍女と勘違いされて。あ、今は使用人だけどね。それで、今に至ります」
ウキウキと、どこかに楽しさを孕ませながら話すシンデレラ。
本人が楽しいならいいんだけど……それって、色々とおかしい、よ？
「つまり、アリソンさん、姉か妹かわからないけど……」
「あ、アリソンさんはお姉さんっぽい」
「お姉さんに使用人扱いされてるってこと？　シンデレラはいいの？　それで、そのシンデレラもどきは？」
「しょゆことー。楽しいからいいや。別に手荒な扱いとちゃうし。あ、なんか元侍女っぽいの。なんかウチとすり替わろうとしたわけじゃないっぽいよ？　ウチもよくわかんないや。ただ言えることとしては……めっさかわいい」
……でも、そのシンデレラもどきっていう人、気になるね。アイシュリーは考えて、あることをすることにする。
「その子の名前わかる？」
「あ、うん。イザベラだけど？」

くぅ……イザベラか。イザベラって名前の人は多いけど……なんとかなるかな？
「容姿は？」
「えっと、金髪に薄い水色の目かな。体は健康体ってか。……あ、もしかして調べるの？」
「うん。ちょっと心配だし。悪い結果だったら言うね」
話が丁度一息ついたとき、向こうからアリソンが帰ってくるのが二人には見えた。
「あ、ご主人様、が来たみたいだよ」
「ですな」

「先程は申し訳ございませんでした」
「いえいえ、お気になさらず。そちらもお忙しい用ですので、私はこれで」
そういうアイシュリーの後ろには、先程から無口を貫いている二人の従者がいる。
「じゃね。どこ行くの？」
「サーカス。王族御用達のサーカス団が出来たの。だからそこの」
「おうよ。楽しんで来ぃ」
「うん、では」
優雅にドレスをつまみ、私に礼をして馬車へと戻っていくアイシュリー。
使用人を見て、使用人も私の方を見て、パッチリと目が合う。
質問したいことなんて山ほどあったけど、何か悪さをしたときのようなパニック状態に陥った私。
そんな私の口からとっさに出た言葉は、こんな一言だった。
「わ、私もシンデレラって呼んでもいいかしら？」
……私のバカあああああああ！
「はい、いいですよ？」
……あ、いいのね。

ようやく纏まった思考を少し掻き乱しながら、私は心の中でシンデレラ、と呟いた。

……今度こそ、呼んでいいのかしら、ね？

コックについて訳が分からなくなる。（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

コックについて訳が分からなくなる。

シンデレラシンデレラシンデレラしんでれらしんでるぇら死んでれらぁ。

心の中でシンデレラ、と呼ぶ練習をしてたら何か地方の田舎者のような口調になってしまったわ。シンデレラ、しんでれら。

スケッチマン公爵の娘についてもまだまだよくわかってないし、シンデレラに対して疑問がたーっくさんあるけれども。私に最初に課せられた使命はただ一つ。

今、目の前で歩いているシンデレラに話しかけること！

もちろんシンデレラ、って呼んでね。

ただそれだけなのにシンデレラ、って言い出せないのよ。私はいつからこんな臆病者になったの！　と自分を叱咤してみるものの、私は実際臆病者でしたわね。……はぁ。

「し、しぃ……」

前を歩くシンデレラを呼ぼうとして、先程から何度も失敗している。

大体、何故シンデレラが私の前を歩いてるのかしら？　あららら？　私がこの町を案内する予定、だったわよね？　まあ昔はここに住んでたっていうし……。

「あっ」

目の前で躓きかけるシンデレラ。その場所には何もないのだけれども……？

「大丈夫？　し、しぃん、でれら」

これはチャンスじゃないの、と思いつつ、いたって自然に振舞いながら声をかけたものの。ものの！　明らかにおかしかったわ！　ああもう私ったらバカなんだから！

「大丈夫です。ありがとうございますお嬢様」

振り向いて笑いながら返事をするシンデレラ。

これ幸い、と脳が判断し、これをきっかけにして会話をしようと口をパクパクさせる。
「え、あ、あ、よ、よかったわ」
会話終了しちゃいましたわ！
私って、本当にバカ……。
「今から、えーっと先程からずっとですが、図書館に向かっていますが、いいですか？」
会話開始！　ささ、会話をつづけなくてはね！
「ええ、いいわよ」
会話、終了……。後に続く言葉が思い浮かばなかったのよ！　私は一回死ねばいいんじゃないの！？　バーカバーカ！　私のバカ！
そこから図書館までは会話が一つもありませんでした……。
しかも、使用人の後をついてく貴族――といっても、私の服はそこまで貴族のように豪華じゃないけれど――という不思議な構図が視線にさらされていないかとキョロキョロしたりして。多分私が一方的に気まずい思いをして、精神的にやっと、図書館に着いた。
建物の中を慣れた様子で進み、向かった先は本棚ではなく、休憩スペース。
その椅子に腰かけている青年――背中姿しか見えない――に近づき、人差し指だけまっすぐ伸ばして軽く肩を叩く。
それに反応した青年がこちらを振り向、こうとして、シンデレラの人差し指が頬に刺さった。
「てめっ」
してやられた、とでも言うように、青年は笑いながら返し、こちらに気付くと不機嫌な顔になった。
な、何よ。大体そこのあんた、庶民でしょうがっ。こちらは曲がりなりにも貴族なのよ？　礼儀とかは気にしないけど、そんなあからさまな不機嫌な顔見せられて不満に思わないわけないじゃない！
そこで私は近付いて、名乗り上げることにする。
「はじめまして。アリソン・セニグリアですの」

別に先程のように、相手が公爵の娘、なんてこともないからミドルネームまでは名乗りませんよ？
「……レオ、だ」
うう何この人！　貴族が家名名乗ってるっていうのに、自分が名前だけって、どんな神経してんのよ！
大体どうしてこの人の所に連れてきたの！　と不満をぶつけるような形でシンデレラを睨むように見ると、慌てたようにレオと名乗った青年の腕を引っ張って本棚の影へと隠れた。まったく……、失礼しちゃうわ！

「ちょ、何やってんのお前。あ、腕大丈夫？」
「大丈夫だ。何やってんのって聞きてえのはこっちの方だってーの。なんで連れてきた」
無理やり引っ張った腕を気にしつつ、レオを叱ろうとすれば逆ギレされた。
「いや、だって……」
曲がりなりにも一応図書館ですから、声は最小限に抑えつつ、かつアリソンさんに聞こえないようにしつつ、言い訳をする。
そりゃ、レオが貴族嫌いだってことは知ってたし、だから学校の友達――ほとんど貴族――は連れてこないようにしてたけどさ。
「だってじゃねえよ。……理由は」
なんとなく、と答えるわけにもいかず、理解してくれそうな言葉を選んで言う。
「いやさね、うちの父親がセニグリア家に嫁いだの知ってる？　あ、嫁がれた？　まあ結婚したの」
「……知らねえよ。聞いてねえし」
ですよねー、と苦笑いしつつ、つらつらと言い訳を述べる。
「そんで、つまりあの方はお姉様なわけなのです」
「大体わかった。けどお前妹だろ？　なんだその服」
指摘されて気付く。そういえば使用人服でしたね！

「これは色々ありまして……」
めんどくさいからはぐらかそうと試みれば睨まれました。はい、ごめんなさい。
反省しながら理由を述べ、父親の事を抜かしつつ実は今の状況を楽しんでると言えば微妙な顔をされた。
「で、昨日からうちも貴族な感じ！」
貴族嫌いのレオにわざわざそう言って、出方を見る。
だって、隠し事して、それで嫌われたらいやじゃん？　ま、現在進行形で父親のこと隠してますけど。だってレオ気付かないっぽいし。
「……普通に、なれよ」
……えーっと？　普通になれ、ってつまりは庶民に戻れと？　レオ君、もう少し分かるように言えってーの。
「ん？　それよりお前の父親は、自分の娘がそんなんでいいのか？」
あ、やっと気付いた。
「いや、ちょっと色々あって死んじまったぜ！」
「……は？」
いや、そう言われましても。うちも早馬で病で倒れたとしか聞いてないんですよ。
こんなに明るいって変だよね、知ってる。
自嘲しつつ、レオの色んな感情が混ざり合った顔を見つつ、父親についても色々説明したところで、いざアリソンさんのところへ。

どこかへ行ってしまった二人が一向に帰って来ないので、まさか忘れたり置き去りにされたんじゃないでしょうね、と考え始めた頃、やっと二人が帰ってきた。
ちょっと……シンデレラ、これは流石にないわ。
お友達を紹介して、無礼で、それで長時間待たせるのは流石に……。
「……先程は、すいません」

……まあ、許そうじゃない。バケツについてのこともあるし。
不機嫌顔も治ってるようだし。といっても、今度は無口、というような感じで、好意的には見えない。
そう思い、まじまじと顔を見て見れば、意外とこの人は美形なことに気が付く。歳は……十八ぐらいかしら？
これで貴族で、性格がよかったら絶対婚約申し込んだわね……。
はぁ。
私はもう今年で十六。そろそろ婚約者がいてもおかしくない。お姉様は十八なのに婚約者がいないけれども、それはセニグリア家だからであって。
お義父様は大商人だったから、そのお金を使ってお母様が今の家を建て直してくれたら、二人とも婚約者ができるだろうけど。
貴族に生まれたからには恋愛結婚などどうでもいい。
大体、貴族と言うのは家の名を背負うものであり、恋愛に明け暮れて家を傾かせてしまったらそれは貴族として相応しくないと思ってる。
そりゃ、恋愛には憧れるわよ？
ただ、今庶民で流行りの『エリオとブリジット』なんて小説はよくないと思うの。あまつさえ自殺ですって？　ホント、貴族として恥ずかしくはないのかしら？
セニグリア家は領地なんてないに等しいけれど、貴族であれば領民から税を押収するかわりに、いい住み心地を提供するのが正しい貴族だわ。
他の貴族と結婚して繋がりを持つのも一つの仕事。贅沢してるならそれぐらいしなきゃ。
女ってのは、政略結婚して、嫁いだ先で上手くやるのが仕事ですからね。
再度言うけれども、別に恋愛が悪いとは言ってないの。
ただ、それに身を任せて破滅させるのはよくないってことよ。
そしていつの間にかに考えが逸れてきたことに気付き、あわてて

現実と対面した。
「ねえシンデレラ、ここには他に用があって？」
「ありませんが……」
「じゃあそろそろ昼食の時間ですし、一度家に帰りましょう」
……あ！
「昼食の経験はあるかしら？　私達は一日に三食食べるのよ」
農民のあたりは二食だったわよね、と思い返しつつ問う。
「はい、存じ上げております。そうですね、帰りましょう。じゃ」
あら、知ってたの。じゃあテーブルマナーが身についてたこともそれに考えながらレオに別れをいいつつ、建物から出ようとすると、丁度コックとすれ違った。
「あれ？　どうしてここにいるのかしら？」
大体昼食を作っている時間でしょう？　と含ませつつ訊くと、困った顔で返事をされる。
「すいません、今日の昼食はちょっと……」
あら、そう、と返してそのまま別れる。
コックがたまに用事でいなくなることはある。どうせ訳ありのコックだから、別に問いただしたりもしない。
そういうときはコックが自ら知り合いに頼んで料理を作ってくれているから、大した不便もないのだ。ちゃんとそれなりの腕だし、下手したらコックより美味いかもしれない。
コックについて質問してきたシンデレラに説明しつつ、図書館に何の用があったのかを考えてみる。
コックの事について彼自身に聞いたことはないけれども、気になることは気になる。
料理の腕も悪くないからもう少しいい所でもよさそうなのに。まあそこらへんは訳ありだからこそこの家でコックをやってるんだけれども。図書館に行く訳ありの料理人。……どう考えてもコックの事がわからないわ。
まぁいっか。

コックについて訳が分からなくなる。（後書き）

エリオとブリジットは、あれです。ロ――とジュ――です

頭を撫でられる。

妹のかわいいかわいいイザベラ、使用人のシンデレラをこの家に来て数日は過ぎて。

二人とも生活に慣れてきたその頃、二つの出来事を起きた。

それはある日の夕食後の席でのこと。

「実は今日、二つの席があるの。片方は悪い知らせで、片方は良い知らせ。どっちから聞きたいかしら？」

相対する二つの知らせ。どっちから聞こうかしら……。

「イザベラ、あなたはどちらから聞きたい？」

お姉さまがイザベラに尋ねる。最近の私たちは、イザベラ優先の法則が成り立っていた。だって、だって！　イザベラがかわいいんですもの！

ちなみにこの席にはシンデレラも一緒だ。どうせ六人しかいないんだもの。シンデレラもよく働いてくれてるから、来てくれた次の日からずっとそう。

「え、じゃあ良い知らせから……」

当初は優遇されるたびに遠慮していたイザベラも、それを幾度か繰り返すと諦めた。だって私たち譲歩しないもの。うふふ。

「聞いて驚きなさい？」

慎重に話しはじめ、一度貯めるお母様。ああ、もう、何よ！　焦らさないで欲しいわ！

「なんと、オーガスタス殿下のお妃選びの開催決定！」

一瞬の沈黙。

「まあそれは素晴らしいわ！　それはいつになりますの？」

「それはまだ決まってないけど、今月中になりそうよ」

お姉様が手をたたいて喜び、同じようにお母様も返す。

イザベラはお妃選びがわからないのか、それとも別の理由かはわからないけれども、頭を傾げている。まあその手は一応お姉様たち

を真似してたたいているけども。
一方、シンデレラは「へぇー」とでも言うような顔で静かにしていた。まぁ……使用人には関係ない話になってしまうものね。
そしてコックはいつも通り、少しほほえみを浮かべた顔。
「でもお母様、それって私たちは行ってもいいんですの？」
お義父様との結婚は、あちらが婿入りしてきたことにはなっているものの、やはりそれでは都合が悪いし、招待状もまだなんじゃあ……。
「ええ、すべての貴族にすでに招待状が来てるの。開催とかはまた別に来るんですって」
「すべての貴族！？」
殿下についての性格なんて聞いたことないけれど、すべての貴族を招くなんて……。
「ってことは……既にお相手は決まってまして？」
お姉様が残念そうに言った。
そうよね。貴族をすべて招いたらお妃選びどころじゃないし、たぶんお披露目に近いもの。これじゃあ最初っからチャンスはないようなものじゃない……。
「そうみたいね」
お母様が答える。やっぱりそうか……。でも、
「でも、そのときに私とアリーは良い殿方を探すことができますわね！」
その通りですお姉様。
商人と結婚したことについていやな思いを抱いてる家とは関係を気付けなさそうですが、逆にそれ目当てで近づいてくる人もいるかもしれないから、それには注意しなくてはね。
「あの、悪い知らせっていうのは……」
お妃選びという名の本命お披露目パーティーについて語っていた私たちの間を遮ったのはイザベラ。
いえ、遮ったっていうのはおかしいわ。イザベラが悪いことをし

たみたいじゃないの。
「ああ……そうなのよ」
お母様が残念そうに微笑む。
お義父様が初日、しかも会わずに逝ってしまって、実際にお母様は疲れている。その中でもお義父様が残してくれたお金を使って家を建て直そうとしてるから大変だ。
それなのにまた何か？
「コック君が、やめるらしいの」
……え？
「うっそ……」
コックさん、やめちゃうの？
信じられない、悲しい、しょうがない。いろんな思いが混じった顔を向けると、コックは悲しそうに笑った。
「はい、コック君」
「はい。二年間、ありがとうございました。私を雇っていただいて、本当にありがとうございました」
いえいえ、こちらこそありがとう。
ほかの貴族よりは明らかに低賃金だったはず。それに休む時にはちゃんと代理人まで用意してくれて。
「この度は、私情でやめさせていただきます。いつも代理を頼んでる人ももう来れません。そこらへんはすでに奥様に伝えてあります」
「ええ。明日からは、別の人」
「え、明日にもやめるんですの！？」
そんな……急すぎるんじゃないかしら？
胸の奥が重かった。
使用人は、いつも賃金が安いからという理由で一か月程度でやめていく人が多かった。多くても三か月。ほとんどが初心者で、この家で経験を積んでからほかの家へ、という感じで。ここは他の貴族への、使用人派遣の家にもなっていた。対して得はなかったけれど。
家族以外の人で、二年も過ごしたのだ。寂しくないわけが、ない

じゃないっ！
何か目頭が熱い。うぅ……、泣くものですか！　いくら家の中と言えど、泣くわけには！
「ええ……。急で申し訳ありません。本当に、ありがとうございました」
その言葉に追い打ちを掛けられるように、下まぶたに涙が出てくる。ダメ、喋らなければバレないけれど、さすがに涙を落としたら……！
「そんな顔しないの。きっとまたどこかで会えるわよ」
そんな私の様子に気づいたお母様が声をかける。無視してもよかったのに！
ぐすっ。
鼻をすする音。
てっきり私がすすってしまったのかと思ったけど、どうやら違ったらしい。
ぼやける視界のなか、目から涙がこぼれないように目を見れば、イザベラが泣いていた。
ああもうこの子ったら！
淑女が泣いちゃダメじゃない！　それと！
「うぃっ……ぅぅ……」
私も、泣いちゃうじゃない！
はい、涙落ちた！　涙落ちました！
そう自覚した瞬間、椅子から立ち上がり、わき目も振らずに自分の部屋を目指す。後ろで一つ椅子から立ち上がった音が聞こえたけど、多分それはお姉様。
すごい勢いでドアを閉めて、ベッドへとダイブ。はしたなくたっていいじゃない。どうせ誰も見てないんだもの。
お日様のにおいがする布団に顔をうずめ、涙が布に吸い取られていくのを感じながら、早く泣き止めと自分に命令。
命令に聞かない自分。あなた何様のつもり。……ふんっ。

これは寂しさだ。
二年前では庶民学校に通っていた。
貴族なのに庶民学校っていうのも変かもしれないけれど、このご時世、貴族の婦女が行くのは庶民学校だと相場が決まっている。貴族学校は男子のみだから。
まあそこはおいておくとして。
庶民学校を離れ、自動的にそこで作った友達とも別れることとなり、多少の寂しさを感じていたころ。
そのころに、コックはやってきたのだ。
最初は、いつも通り、ここで経験を積んで他の貴族の家へと行く人かと思っていたら。
一か月経ってもやめない。二か月、三か月と経ってもやめない。
そして、六か月経つ頃には、使用人とコックという関係ながら、家族のように思っていた。……そう、家族だ。
一緒に何かをしたとか、そういうのはなかったけれど。
家族が、いなくなっちゃうんだ。
そう思うと、また涙が溢れてくる。私はいつから涙もろくなったのかしら？　涙をうまく使えてこそ女よ。……うぅ。
コンコン。
部屋をノックされた。お姉様かしら？
「アリソン様、よろしいですか？」
……人が泣いてるのを知った上で訪ねるなんて、配慮が足りないんじゃないかしら。
泣いていたのがバレバレなのは承知の上だけど、やはり泣きっぱなしで人前に出るのは良くない。まあ顔は腫れて無残なのだけれども。
とりあえずハンカチで顔を拭き、ドアを開ける。
そこには、申し訳なさそうな顔のコックがいた。
……やっぱり、かっこいいわね。
そんなことを考える自分に呆れつつ、そんな自分がおかしかった

ので、自然と笑顔が出た。自然と。そしてコックを部屋へと招き入れる。
普通は殿方を部屋へと招き入れたりはしないけれど、コックは特別。家族だから。
コックがふわっと笑って、こちらに手を伸ばす。
条件反射で叩かれるのかと思って首を竦めてしまうが、直後に頭に温かいものが乗せられたのを感じた。
これは、手だ。
……ええ、手よ。いや、それくらいわかるわ。
そのまま頭を撫でられたので少し驚くが、何か気持ちいいのでそのまま撫でられることにする。自然と目は閉じた。
これはコックが家族だから許すの。
幾度か撫でられ、そのまま手が後頭部で止まる。
どうしたのかしら？　と思い、目を開ければ、何やら焦ったコックの顔が
「ど――」
うしたの、と言おうとした言葉は遮られた。
何かに押しつけられる顔。
真っ暗になる視界
背中に周る手。
密着する体
頭にかかる呼吸音。
……あ、ら？　私、抱きしめ、ら、え？

頭を撫でられる。（後書き）

あらすじに書いたものとは離れてしまいましたが、お気に入り登録ありがとうございます。
ちなみに、シンデレラはさびしいとは思いつつも、泣いてません。
（あれ……。泣かないといけない雰囲気！？）
という心情。

レオに尋ねることになる。

新しいコックの作る朝食をとりつつも、私の頭の中はぐるぐると様々な感情がうごめいていた。それもこれもすべてはコックのせいよ。今日から来た人じゃなくて、昨日までいたコックの、マロー。

実は昨日まで知らなかった。昨日教えてもらった。……昨日のことは思い出したくないのでそれ以上は考えないことにしてっと。

今回のコックは訳ありではなく新人のようだ。まずいというわけではないけれど。そう考えていると自然にマローとつながってしまう。

昨夜のことは、考えないようにしたいというのに。

抱きしめられて、そのまま沈黙が続いて。

好きです、と言われて。

謝られて、私は何も声をかけることができずに、マローは家を出て行ったのだ。

寝るまではぐるぐるとマローのことを考え続け、そのうちに心の中でコックではなくマローと呼ぶようになっていた。

マローという名前を教えてもらったのも、好きだと言われた時のことだ。

好きって、なんだろ。

自分で作った料理を食べて顔をしかめるコックを見つつ、私は考えを続ける。

あれは。自分の思い上がりでなければ、いわゆる恋愛感情によるものだろうか。身分違いの、恋、か。

告白、された。告白されたというのに、冷静に分析している自分もいた。まあ慌てすぎて表情に出してないのでよしとして。

マローは、家族だ。

血は繋がってないし、名前さえ知らなかったが、家族だった。家族に恋愛感情を抱かれた。アリーの心情はとても複雑でございます。

貴族によっては、血を薄めないために親族で結婚することも少なくない。血が近すぎると子供が病弱になり、そのまた子供を産む前に死んでしまう可能性があるので、いとこ同士で結婚させることが多いという。まあセニグリア家はそんなことしたことないけど。

食卓の雰囲気はどんよりしていた。

おそらく新しいコックはそれが自分のせいだとでも考えているのだろう。料理がまずかったか、などでも。

もちろん事実は違う。マローが、いなくなっちゃったから。

お母様、お姉様はもちろん、ここにきて日が浅いイザベラも元気がない。唯一いつも通りなのはシンデレラぐらいだ。

事実、イザベラもそうだけど、シンデレラとマローにそんな接点はなかったわけだし。別におかしな反応じゃないけれども、少しは残念だとか考えないのかしら？　それとも、心の中ではそう考えるとか。

どっちにしろ私が口出す話じゃないんだけどね。

朝食をとり終わった後は、コックに対して色々と料理の評価をしてそれぞれの部屋に戻る。

気持ちが下がっているし、告白もよくわからない。

気晴らしに散歩に行こうとすると、丁度家の門が閉じるところだった。誰か私のように散歩へ出かけたのかしら？

後を追うようにして家を出れば、前にはシンデレラが。あの子も散歩かしら？

なんとなく。なんとなく、ついていこうかしら？

シンデレラの頭の中で再生されるのは、去年のレオとの会話だ。

「恋愛って、よくわかんないねー」

何を発端に話題がこうなったかは知らない。けれど、それに対してレオが話し始めたことが、今はとても重要なのだ。

「兄が、貴族で料理人やってんだけどね」

「え、お兄さんいたんだ」

三年間ぐらい友達をやっているはずなんだけど、教えてもらったことなんですけど。
貴族は嫌いだと言っていたので、庶民なのは確定していた。そして、その一言で庶民なのは確定になった。
で、お兄さんは貴族嫌いじゃない、と。
「そこのお嬢様に恋したんだってさ」
「へー……」
はっきりと思い出せるのはこれぐらい。
使用人が主人に恋する話しぐらいは聞いたことある。これぐらいじゃあレオを訪ねようとは思わない。
もう一つ、思い当たることがあるのだ。
この前、図書館を出るときに、すれ違ったから。
記憶を掘り返せば、なんとなーく、今までにもすれ違ったような気が、しない、までも、ない、かも、しれない、ような。
いつもの机のいつもの席。そこにレオを認識。
とりあえず前にあるイスをひいて座る。いつも斜めに座るんだけどね。
「やあレオ君」
ちょっと勿体ぶってみた。
「やっほ」
「ところで、君のお兄さん、出せやボケェ！」
あくまで周りに迷惑を掛けない声です。ええ。
「……え、よくわかないんだけど」
人のよさそうな顔しちゃって！　ごめん、関係なかったね。
「えっとさ、レオのお兄さん料理人やってるって言ってたじゃん」
レオの眉がぴくっとした。あ、こりゃなんかあるっぽいよ！　どうやら話したくないわけでもない、ので！
「色々、教えてほしいんだけど」
結論から言えば、思い間違いだった。……うへえ。

お兄さんの名前はマローと言って、二年前からアグイレ家で働いてるんだとか。……ウチコックの名前知らへんがな。でもそのアグイレ家って働いてるんだったら違うかー……。興味本位聞いたはいいものの、自分予想とはずれると何かむなしいものがあるな……。

案内してもらったわけではなく、勝手について行っている。

その認識があるため、私は図書館についてもなんとなくシンデレラの前に姿を現すことができず、ついつい近くの本棚の陰に隠れてしまった。

静かな図書館で交わされる会話。いくら他の人の迷惑にならない声だとしても、聞こえるは聞こえるのだ。

レオの兄。コック。

その二つの単語に私の心は跳ね上がる。

もしかして、また、会える。マローなんて名前、少ないとは言えないものの、多くもない名前だ。

これは決して恋心なんかじゃないのは私が一番わかっていた。マローは兄だ。家族だ。告白されたことに様々な思いを抱きつつも、未だに認識は家族のままで、異性としてだなんて思ってなかった。

アグイレ家。二年前。

マローのことじゃなかったことに、気持ちが一気に落ち込んだ。期待していた分だけダメージは大きい。

……アグイレ家？

私の頭に何か引っかかることがある。あれ？　ちょっと待って。アグイレ家？

あれは、確か、一年前。

何人目かもわからないコックで、それまでに食べた料理までは一番おいしかった。そのコックは確か、舌の肥えたアグイレ家に行ったはず！

……まあだからといって、別にどうにもならないわね。

コックを何人も雇う貴族だっているのだ。アグイレ家は金持ちだ

し、別に数人いたっておかしくはない。
はぁ……。
「じゃねー」
棚の向こうからシンデレラの声が聞こえ、見つかったわけでもないのに体が硬直する。本の隙間からシンデレラが出ていくのを見て、あとで自分も適当に帰るかと考えて。
――声を、かけられた。
「シンデレラの、お姉さん？」
初対面の時よりはずいぶん友好的な声。
シンデレラの姉ではないということを訂正しようと思いつつ、自分が盗み聞きしていたことがバレたのではないかと思うと心がバクバクと跳ねた。
それでも私は貴族の娘。
何事もなかったかのように笑顔を作り、振り向く。
「ああ。レオさん、でしたっけ？」
「あ、はい。レオ・オーティスです」
どうやら今回はすんなりと名前を名乗るらしい。ふむふむ。
この前と態度を変えたこともあるし、私も名前を名乗ってあげようじゃないの？　ま、私はそんなの、実際は気にしないんですけれどもね？
「アリー・セニグリアよ。シンデレラの姉ではないの。そこは気をつけなさい？」
お母様の娘であり、私はお姉様の妹であり、かつイザベラの姉であり、お父様の娘であり、お義父様の娘であり、マロー、の、妹で、ある。
シンデレラを下に見るつもりではないけれど、マローのように一年以上過ごしたわけでもないし、書面上で親戚関係になったわけでもないし、もちろん血縁関係もない。
「あー、はい。ここで何してたんですか？」
貴族に対しては少々失礼な物言いだが、私は気にしない。それよ

りも、盗み聞きについてばれて、それを問い詰められているような感覚がしてならないのだ。
いまここで正直に告白して謝るか、知らないふりをするか。
「本を、見ていたの」
本を見て、耳は会話を聞いていた。が正しいのだけれども。
嘘はついてないわよ？　ほ、ほんとよ！　嘘ではないもの！
「へぇー……」
どうでもいい、というように返される言葉。これはさすがに私に対して失礼ではないかと思ったが、どうやら盗み聞きは疑われてないらしい。
その点に安堵しつつ、その口からまた何が飛び出すのか身構えるが、相手もそれは同じようだ。
よって、二人の間で無言が続く。
……ここは貴族の私が去るべきだろう。
「じゃあ、ごきげんよう」
いかにも身分が高いですよーとでもいうような挨拶をして、踵を返す。ま、実際の身分は低いけれども。
さて、昼食は朝食より出来がよくなっておりますよーに。

サーカスに行くことになる。

新しいコックが来てから数日が過ぎたある日。質素な黒い郵便受け。その中に、一枚の封筒が入っていた。

何も印がないのを見るに、自分の手で中に入れたのだろうけど。誰かしら？　と思って差出人を見ると、マローと書かれていた。

……マロー！

て、手紙を持ってくるなんてな、何の用かしら！？　それより、家に来たんだったら訪ねてくれればいいのに！

今すぐにでもナイフで封を開けたいところだが、この手紙は別に私宛ではないため、素早く家に入ってお母様に手渡す。早く開けるよう催促する目と、差出人の名前を見ると、呆れたように笑ってナイフで封を開けた。

お母様は明るくなった。お義父様の葬式は行わないと決めると、何か踏ん切りがついたように変わったのだ。言わなかったけれど、葬式を行った方が良かったのではないかと私は思う。

話を戻して、お母様の手元には手紙と、五枚のチケットが。……なんのかしら？

「あらあらまぁ」

少し驚いたように声を上げるお母様の手元を覗き込む。そこにはこう書いてあった。

『サーカスのチケットです。みなさんで楽しんできてください』

「サー、カス！？」

サーカス鑑賞なんて貴族にしかできないことだ。それはもちろん値段が高いから。商人のお義父様と結婚してお金が入ったとはいえど、まだ贅沢はできないこの時期。サーカスね……。楽しみだけど、なんでマローが？

マローは訳ありで……。いらぬことを思い出しかけた。家族で、うーん……。でもサーカスのチケットを、しかも五枚も買えるよう

な人だとは思えないのだけれども。
「五人なら、シンデレラも一緒でいいかしらね」
「あ」
そっか。五人だ。シンデレラも一緒だわね！
シンデレラは使用人だけど、この家の家族になりつつあった。そんなに日にちも経ってないけれども、使用人が一人きりだという分、何かと関係が近くなるのだ。
「今日、行きましょうか」
頭の中の予定表を思い出しながら、満面の笑みで頷いた。

使用人は見た。はい、見ました、見ちゃいました。
いつも通り屋敷の中を掃除しつつ、やっぱりなんでこんなことなったんだろーいやー自分のせいだよー、と脳内会議を繰り広げていた時のこと。
「うーん？　こうすれば入るかなぁ？　ん、んー！」
イザベラお嬢様ちゃんが部屋のドアを開けっ放しにして何かをしていた。……いや、ドア開けっ放しだし。好奇心がてら、掃除がてら覗かせて頂こうじゃないの！
部屋の前を雑巾で静かに拭き、バレないように部屋を除くと、イザベラが向こう側の鏡に向かって――ドレスを捲し上げていた。
……う、うん。なんにも、見なかった。
実際下着は見えていない。イザベラの部屋にある鏡は化粧台の鏡のため、床に這いつくばっている人には下の方が見えないのだ。下の方とは、イザベラの下着が映っている、と思われる場所です。
ドレスを捲るのは好きだけど、自分からめくられるとね……。
ドレスの下の素肌あたりを弄って取り出されたのは――鞭。
……鞭？
ちょっと天然で、かわいくて、ちょっと不思議なお嬢様が――ドレスを捲し上げる変態で、鞭を常備する自主規制だっただと！？
いやもちろん自主規制とは限らないけど、鞭を持ってるって尋常じ

ゃないっていうか普通は持ってませんよね！？　自主規制ですか、自主規制なんですか！？

「これでよし、と！」

その鞭を再び捲し上げているドレスの内側に取り付け、たのかな？　取り付け、満足したようにドレスを下ろした。鞭をセットしてたんかな？

そろそろ振り返りそうなのでそのままゆっくりと後退し、向きを変える。そうすれば覗いていただなんて思うまい。

「あ、シンデレラさん」

バレてないとは信じたいけど、万が一というのがあるので肩がビクンと跳ねた。あああそういえばあんな趣味がある、いやありそうなくらいだ。もしかしたら天然っていうのは演技かもしれないしこの家に入ったのだってわざとかもしれないしでも演技だったらうち気づきそうだしうちが使用人やるからあの子はお嬢様なんだしうわわわわわわわわ。

「ハンカチ、汚しちゃって。洗ってもらってもいい？」

パニック状態のうちに対し、イザベラは普通だった。慌て損？　にしてもイザベラが何かを頼むなんてめずらしいなー、と思いつつ、特に断る理由もないので受けることにする。

「あの、これ」

差し出されたのはキレイな模様のハンカチ。……というよりバンダナ？

「はい。……えと？」

「あ、ごめん、やっぱ自分で洗います！　声かけてごめんなさい！」

手渡されたハンカチを取ろうとして手をひっこめられた。なんやー。

バタバタと部屋の中へと戻るイザベラ。……なんだったん？

「そろそろ一か月かー……。やっぱシンデレラがいないとさびしいな」

「お父さん亡くなって、でもあるね。……シーンーデーレーラー」
ある時間、ある場所で、数人がシンデレラについて話していた
「無事にやってたらいいよな」
「それでもやっぱり戻ってきてほしいじゃん！　てか、あんたさっきから何にも言わないけど、さびしいぐらいは思ってるんでしょうね！？　マシュー！」
「うるっせーな。てめぇには関係ねえだろ！？」
マシューと呼ばれた少年が不機嫌そうに答える。
「まったくもー。シンデレラがいなくなるときには一番ヘコんだあんたのことを心配してんの。あ、そういえばシンデレラと密会してるって聞いたんだけど」
「み、密会なんてしてねえよ！　だいたい密会って人聞き悪いな！　たまたま、たまたま会っただけだ！」
「ふーん？　会ったんだ」
自分の失言に気づいた少年が固まった。その顔にはやってしまった、という後悔の思いで一杯だ。
「……誰がそんなの知ってんだよ」
「僕だ」
「お前か！」
貴様裏切ったな、と幼馴染の親友を睨めば、興味がなさそうに視線をそらされる。
「それだったらお前もシンデレラに話しかければよかったじゃねえかよ」
「別に。お前らがいい雰囲気だしてたからな」
「そ、そんな雰囲気出してねえよ！」
存分少年をからかった周りの人が笑い、少年が羞恥と怒りに体を真っ赤に染める。
「てめ、てめえらなんか！」
だっきらいだ！　などと幼馴染たちに言えるわけもないので、その場から飛び出す。

そこで、見つけたのだ。
シンデレラを。
か、かわいい！
じゃないぞマシュー。なんでシンデレラがこんなところに？　え？　まじ？　あれほんとにシンデレラだった？　見間違いじゃないよな？　目を凝らして見ても、あれはシンデレラだ。……え、まじ？　夢じゃない！？
少年は、満面の笑顔で幼馴染たちのもとへと戻り、呆れるみんなの視線を受けながら、その事実を嬉々として話すのだった。

「この鳩が、あなたにお手紙をお届けいたしましょう」
楽しい楽しいサーカスのショーがいくつか終わり、次の演目への繋ぎのために現れた鳩使いの少年。
先ほどから演目の繋ぎには私たちと変わらない歳の少年少女が出てきており、ピエロだったり、遊具みたいなのを上下に回転するものに乗ってハラハラさせてくれる人もいた。
「貰いたい人は手を挙げよう！」
その声にはじかれたように手を挙げる子供たち。……といっても庶民のみである。貴族の子供は挙げたくても親が挙げさせないようにしてるみたいだ。まあそれが普通だわね。
イザベラを見てみれば、意外手を挙げていなかった。イザベラの性格的に手を挙げてもよさそうなのにねえ？
とは言うものの、ここに来る前、確かにイザベラはサーカスに来るのを拒絶している節があった。まあ来てみれば楽しそうに見ているわけだが。
「はい、じゃあそこの僕！」
少年がさしたのは私。ではなく、私の後ろに座っていた子供だった。
選ばれたのがうれしいのか、隣の母親と思われる女性の服をひっぱって嬉しそうに話している。母親も優しそうに答え、まだ小さい

子供のために引っ張り上げて座席に立たせた。
座席に立つのはマナー違反だが、逆に低くても鳩が子供を捉えづらいだろう。まあいいんじゃないかしら？
ちなみに、手紙というのは、さきほどのショーで象が書いた手紙だ。像が花を使って文字を書いてるのを見た瞬間、ありえないと叫びそうになった。
鳩使いの少年の肩から飛び立つ鳩。その足には小さな丸めた紙を持っていて、こちらを目掛けて飛んでくる。
飛んでくる鳩。
ゆっくりと減速してイザベラと私の席の背もたれに止まり。
喜ぶ男の子を横目に、無邪気な子供が微笑ましく思って笑い。
手紙を少年に渡す鳩。満面の笑顔の男の子。
こちらを向く鳩。
赤い目。
何かおぞましいものを感じたが、それは気のせいだったのだろう。
少年の肩へと戻っていく鳩を見つつ、次の演目を楽しみにした。

楽しすぎるサーカスが終わった帰り道。
パタパタと飛んでくる何かが聞こえ、後ろを振り向くと、そこには赤い目の鳩が。
前後に動く頭、嘴。
――左目に感じる、痛み。
――赤い視界。
――左目を抑える手から滴る、何か。
――おそるおそる上げた視線の先の、濡れた鳩のクチバシ。
私の意識は、途切れる。

サーカスに行くことになる。（後書き）

童話じゃないシンデレラに、「シンデレラが復習に、鳩を使ってお姉さんたちの目を潰す」ってのがあったので使ってみました。

……えと、すいません。

シンデレラはなんにもしてないです。ちょっと主人公ちゃんの目を潰したかっただけです。……ごめんねアリー。

舞踏会に行くことになる。（前書き）

短め。

舞踏会に行くことになる。

朝起きると、そこは知っている天井だった。いつも通りの。
視界に違和感があるのだけれど、そういえば左目が開きにくい……。目ヤニかしら？
いや、違う。
――――鳩に刺されてなかった？
自覚したとともにジンジンと疼きだす左目。それを抑えようとして左目に手を当てるけどもちろんそんなので痛みが治まるわけでもない。
そこまで痛くはないものの、継続する痛み。ああ、もう、なんでこんなことに！
ドアがゆっくりと開かれて、あわてて体を起こす。そこには、急に起きたケガ人に驚くイザベラがいた。
私もイザベラも言葉を発するタイミングを失い黙っていると、イザベラの目からじわじわと涙が溢れだす。
「だ、だぃ」
じょうぶ、と尋ねたいけれども、のどが渇いて声が出ない。急いでつばを飲み込む。
「イザベラ、どうし――」
「うあああああああん！　あああああああ！　あああ、ああ、ああああああ！」
叫び、狂いように泣き崩れ始めるイザベラ。ああもう泣かないで、泣かないでちょうだい！　イザベラが泣いてるところなんて見たくない！
ベットから下りてイザベラに近づくけど、やはり視界に違和感がある。なんなのかしら？イザベラの泣き声に気づいて下から誰かが上がってくる音がする。
「ほら、淑女が泣いちゃダメじゃない。ほら、泣かないの」

「うぐっ、うぎっ、うう、あああああああ！　ごめんなさい！
本当にごめんなさいっ！」
ただひたすらに謝るイザベラに、誰かが横に立つ。顔をあげれば、見たことがあるような少年がいる。……あら？　家族の誰かかと思ってたんだけど。
「本当に、申し訳ございませんでした！　謝っても許されないことだとは思っております！　しかし、どうか、どうか！」
奴隷なみに這いつくばり、謝ってくる少年。
――――ああ。鳩使い。
――――許すわけが、ないでしょう？
なんて。
心の中で許せない気持ちもあるけど、もちろん許す気持ちもある。相対する気持ちだ。
確かに鳩を飛ばしたのはこの少年だけど、別に人間に動物が操れるわけもない。だからこの人は悪くない。でもその鳩を管理する責任はこの少年にある。だからこの人が悪い。
「謝罪を、受け入れます」
「アリー！　起きたの！？　大丈夫！？」
「お姉様……」
ドタドタと下から上がってくるお姉様とお母様。
私の部屋は階段の近くで、その階段は玄関へと続いている。玄関の吹き抜けの窓から差し込む光からするに、どうやら今は昼ごろらしい。鼻を聞かせれば、料理のにおいがする。
未だに体を起こさないイザベラを立たせ、同じように頭を下げる少年に声をかける。
「お立ちくださいまし」
もう謝罪を受け入れたんだから、立てばいいのに。まぁ、謝罪を受け入れた途端何事もなかったように立たれたら、それはそれで苛立つけれど。
「ありがとう、ございます」

よく見たら、いや、よく見なくても、この少年の着る服はそこらへんと同じような衣服だということがわかる。
「あのー、こちらへ。アリーにはあとでご飯もってくから、部屋で寝てなさい」
「はーい」

私のいないところで色々な処分が下されたらしい。といっても、治療費とか、そこらへんぐらい。
サーカスの中は暗いに等しかったので、幸いというべきか、自分たちの買っていた鳩が観客の目をつついたことはあまり広まらずに済んだらしい。まあ王室御用達だし、客が少なくなったら困るものね。
鳩については何も触れなかっただとか。……動物にはどのくらいのばつが妥当か、なんてわからないし、別にいいわ。もちろん恨んではいるけれど。
マローからは謝罪の手紙が来た。私のことを知ってることにも驚いたけど、別にマローは悪くないというのに。
それと……イザベラが、心身不安定になっていた。
この前、なぜかイザベラが私に謝ったことと関係しているらしいけど……。まあ、イザベラが心配である。
そしていよいよ、オーガスタス様主催による舞踏会の開催が三日後に迫っていた。
お姉様がだんだんわくわくしているのを見ると、どうやら殿方を捕まえる気満々らしい。私は……、マローのことがあって、よくわからないし。
片目しか見えない私をもらってくれる殿方がいるかどうかさえわからない。しかも、頻繁に訪れない場所以外では、片目だけによる距離感のなさで転びやすいのだ。だから、ね。
「はぁ～～っ、ふぅ」

意味もなく長い溜息を吐いて――とりあえず、今日はもう寝よう。おやすみ。

気が付けば、もう舞踏会当日になっていた。……あーあ。

楽しみを隠し切れないお姉様。複雑な気持ちの私。沈んだ気持ちのシンデレラ。

付き添いでお母様に、使用人としてシンデレラ。このご一行で舞踏会。……すっごい微妙だけど、何事もうまくいきますように、なーんて。

舞踏会に行くことになる。（後書き）

今更ですが、シンデレラは主人公です。……のはず、です。
これ、まるでシンデレラが主人公の作品の、そのお姉様のスピンオフみたいっすねー……あはははは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8983t/

使用人シンデレラ

2011年7月17日03時24分発行